【研修報告】大阪大学21世紀COEプログラム「第3回全国高等学校歴史教育研究会」参加報告

新城高校　澤野　理

一　はじめに

研究会は、大阪大学附属図書館を会場に二〇〇五年八月九日（火）から十一日（木）の三日間にわたって開催された。高校教員の参加は計一〇三名で、うち本県からの参加者は一四名であった。本年度で三回目となった本研究会であるが、その間、対象とする地域や研究会の主題は毎年変化している。筆者は一昨年度の研究会にも出席しており、本稿ではその経験を踏まえ、主題の変遷について若干の考察を行い、本年度の概要について簡潔に報告する。なお、初回より一貫していると考えられる研究会全般の開催意義等については、昨年度および一昨年度の『歴史分科会研究報告』に詳しく書かれているので、そちらを参照されたい。

二　研究会の名称および主題の変遷について

本研究会の名称は、当初、「全国高等学校世界史教員研修会」であったが、翌年度は「全国高等学校歴史教員研修会」（傍点筆者）となり、本年度は標記の名称となった。ここから、主催者側が高校の歴史教育における世界史と日本史の垣根を外そうとしている意図、また、会を大学側と高校側双方の情報発信の場と位置づけようとする意図が読み取れる。そのため、今回は高校教員側からも三件の実践報告がなされた（詳細は後述）。一方、主題については、「シルクロードと世界史」（第一回）、「世界史と日本史の対話」（第二回）、「新しい歴史学と歴史教育」（第三回）という変遷を辿っている。こちらの方は、西欧と中国を中心とした従来の世界史における周辺領域から世界史を捉え直す試みであった前二回の成果を踏まえた上で、世界史の新しい全体像を構築することに力点が移ってきたと見ることができる。

三　大学側よりの提案（一日目、二日目）

初日の冒頭は、桃木至朗教授による「イントロダクション」であった。桃木教授によれば、日本史・世界史におけるA科目の登場によって、我々は従来の枠組みの見直しを迫られており、イスラーム世界や東南アジアなどの地域が従前に比して重視されていることも、その流れに沿った動きである。しかし、実態は、従来の枠組みを変えないまま新たな地域・事項を追加することにとどまり（網羅主義の徹底化）、これが歴史をかえってわかり難くしているという。そして、こうした問題を克服するための試みとして本研究会が開催されているということが、参加者に伝えられた。

続いて、秋田茂教授による「世界システムから見た二十世紀史の全体像」と題する講義があった。ここで秋田教授は、ウォーラースティンの世界システム論を援用して二十世紀におけるヘゲモニー国家の交替とその歴史的意義について論じた。特に、アジア地域の戦後史とに関する部分では、日本の復興が冷戦と脱植民地化、そしてアジアにおける新たな分業体制の形成などとの関係から論じられ、今後の授業に活かせる内容であった。

二日目は、三本の講義があった。まず、武田佐知子教授（大阪外国語大学）による「日本史の読み方―衣服を素材に国家・天皇・身分・女性を考える―」で、古代日本における女帝の服装を切り口として、日本における男性観・女性観の特徴とその変遷などについていくつかの興味深い論考が述べられた。ここでは、「スカート」と「ズボン」をキーワードとして、これらの服装が日本においては男女を分けるシンボルではなく、公的空間と私的空間を分けるシンボルとして当初機能していた（こうした機能が現代的な意味に転換するのは明治以降）ことが指摘された。また、『魏志倭人伝』にある倭人の貫頭衣が、当時の織布技術から考えるとポンチョ型ではないという指摘も参考になった。

続いて、冨山一郎助教授による「歴史と記憶―証言という領域」で、太平洋戦争における沖縄戦の記録を切り口にとして、歴史叙述の素材としての「証言」の扱いをめぐる諸問題についての論考が、精神医学や心理学などの成果と併せて述べられた。従来、歴史学では文献史料を主たる素材として歴史叙述を行っていた（社会学の領域では、オーラル・ライフ・ヒストリーという手法がある）が、これに加えて「証言」、あるいは「個人の記憶」を歴史叙述に活かそうとする場合に、どのような問題点や留意点があるのかということを考えさせられる内容であった。

最後は、桃木教授による「新しい時代区分論」である。ここでは、まず、ヨーロッパ的な近代像を相対化しなければならないという全般的な問題提起がなされた。そのための試みの一つとして、工業化以前の農民社会の時代区分法について、アジアにおける小農社会の形成に着目した論考が述べられた。ここでは、生産技術の発達と連動した人の流動性という問題や、海岸低地の開発と社会・経済の変容との関連などの点で、刺激的な学説であった。

四　高校側の実践報告（三日目）

高校側からは、広島・京都・神奈川の三府県より報告がなされ、このうち、広島と京都の報告は、册封体制をどのように授業に組み入れるかといった個別的な報告であった。これに対し、本県の松木教諭（柏陽高校）からは、前章の冒頭で桃木教授が危惧した歴史教育の現状―旧来の枠組みを変えずに肥大化し続ける「用語量」、そこから拡がる生徒の「世界史離れ」を改善するという立場から、さまざまな授業形態（実物の活用・体験学習の導入など）の可能性や用語の精選についての提案がなされた。

五　むすびにかえて

一昨年度に参加した時、歴史学研究と歴史教育の現場を結びうる「層としての新たなリーダー」の育成という提言がなされたが、これを具体化する点については、まだ充分な協議がなされていないと思われる。研究会の内容をさまざまな生徒に「どう教えるか」の技術的検討はできない、との発言が今回の冒頭に大学側よりあった。確かに、実際の指導法については、高校教員側が主に追究する点であろう。しかし、「なぜ教える必要があるのか」ということについては、高校・大学両者の対話を深めることは可能であるし、そうすることが「リーダー」育成に不可欠であると考えられる。こうした点からも本研究会のさらなる発展を祈念し、筆者も研修に励んでゆきたい。